

AMD Aの代表が被災地へ

現地の支援強化を図る

アジア医師連絡協議会（AMD A）は5日、スマトラ沖地震の被災地のAMD A多国籍医師団活動の支援強化のため、理事長を務める菅沼茂医師がインド・マニパルへ向かったと発表した。菅沼理事長は7日にマンガロールに入り、マニパル医科大を中心に現地の医療体制のネットワークづくりなどを行うという。

AMD Aは地震発生当日の12月26日以降、インドネシア、スリランカ、インドの3カ国で、10カ国から成るAMD A多国籍医師団などのネットワークと緊急体制を敷いて救護活動に当たっている。現在、日本からは菅沼理事長と医師31人、看護師7人、調整員28人、ソーシャルワーカー1人の計68人の医療従事者が派遣されている。

AMD Aの現地レポートによると、インドネシアの一部ではインフラが壊滅状態で、当該地域に行くとコレラに感染するといううわさが飛び交うなど、感染症の被害が深刻な問題となっている。衛生状態の悪化と避難所での集団生活が重なり、感染症の急激な拡大が心配されるため、スリランカでは大量の石けんやタオル、爪切りなどを導入して感染症予防の指導も行っているという。

新潟中越地震から津波へ

タイで活動、日本医師団

【バンムアン（タイ南部）5日共同】津波被害の救援のため日本政府が

派遣した医療チームがタイ南部で活動を活発化させている。パンガー県の浜辺の町、バンムアンの仮設診療所では5日、新潟県中越地震でも救急活動に従事した医師が被災者の治療に当たっていた。

医療チームは、医師や看護師、薬剤師ら二十数人。人口約1万人のうち3000人に上る死者・行方不明者を出しながら、常駐する医師がいないバンムアンに昨年末から展開している。

仮設診療所は、被災した約3500人が身を寄せるテント村にあり、避難時にけがをした人や、初めて体験した恐怖や家族を失った悲しみによるストレスを訴える人など、訪れる被災者が後を絶たない。

「頭痛はありませんか」。診療所のテントで東京の医師、本間正人さん（42）が優しく声をかけた。相手は津波に家ごと流された漁師のステップ・トンスリケウさん（40）。10人家族だが姉と妹、長女ら5人が今も安否不明だ。「あれ以来、毎日がつらくて眠ることができない」。そう訴えるステップさんの話をじっくり聞いた上で睡眠薬を処方した。

本間さんは、昨年10月の中越地震で

も直後に被災地に入った経験を持つ。精神的ショックによる不眠や頭痛、どうきという被災者の症状は地震も津波も共通だが、「ここでは何が起きたのかいまだに理解できない人が大半。また津波が来ると思っている人もおり、恐怖は大きい」と話す。

それだけに息の長いケアが必要。医師だけでなくタイ語通訳などを担当するスタッフも被災者の話し相手となり、心の平穏を取り戻す手伝いを続けているという。

日本医療チームが本格活動 地震被害のアチェ

【バンダアチェ3日共同】スマトラ沖地震で大きな被害を受けたインドネシア・アチェ州に日本政府が派遣した緊急援助隊医療チームが3日、州都バンダアチェのラマラ地区で本格的な医療活動を開始した。

チームは医師4人、看護師7人など計22人。インドネシア国軍も駐屯している運動場に持ち込んだ計11のテントで仮設診療所を開いた。

チームの二宮宣文医師は「津波に巻

き込まれた際に外傷を負った患者が多い。抗生物質が不足しており、早急に追加が必要だ」と話している。

同医師によると、清潔な水が不足していることから、今後、感染症の拡大が懸念されるほか、建物倒壊などで土ぼこりがひどく、呼吸器系の病気多発が予想されるという。

感染症対策に62億円要請 津波被害でWHO

【ジュネーブ5日共同】世界保健機関（WHO）は5日、スマトラ沖地震による津波被災地の感染症まん延防止など衛生対策に、最低でも6000万ドル（約62億6000万円）が緊急に必要なだと発表した。

WHOによると、復興支援緊急首脳会議出席のためジャカルタ入りしている李鍾郁（イ・ジョンウク）WHO事務局長は同日、コレラや赤痢など感染症の恐れにさらされている被災者約500万人のうち、特に約15万人が危機的状況で、清潔な飲料水の供給が最優先課題だと述べた。

WHOは、今週末までに被災者に飲

料水が供給されなければ、津波による死者数と同じぐらいの人数が感染症の犠牲になると警告している。

「遺体から感染」は誤解 集団埋葬やめるとWHO

【ワシントン5日共同】WHOの米州地域事務局（ワシントン）は4日、「被災者の遺体が感染症まん延の原因になるというのは大きな誤解だ」として、感染症予防を目的とする遺体の集団埋葬などはやめるべきだとの見解を発表した。同事務局は、集団埋葬や火葬によって個人の特定や移送が難しくなり、遺族をより苦しめる結果を招くとしている。

同事務局の専門家によると、感染症の原因細菌やウイルスなどの病原体は、生きた人や動物の体内でよく増殖する。仮に風土病などに感染していても、死亡後は体温が急激に下がるため病原体の多くは死滅。遺体の血液などに直接触れない限り感染の恐れは小さく、感染症を広げる恐れは、非衛生的な環境に置かれた生存者の方がはるかに大きいという。